

## コシアブラの接ぎ木増殖

竹内忠義 (群馬県林業試験場)

## I はじめに

コシアブラ (*Acanthopanax sciadphyloides*) の若芽は、風味がよく、栄養価も高く、山菜の中でも特に優れた品目の一つであり (5)、近年人気のため店頭にも出まわるようになってきている。

コシアブラの利用は、効率的な栽培方法が確立されていないことから、山採りによるものが主流と考えられる。そのため、乱獲が懸念される。栽培方法の確立は、コシアブラの保全とともに、その人気から中山間地域の安定した副収入源としても期待がもてる。

これまでにコシアブラの栽培方法について、様々な検討がなされてきている (2) (3) (8)。そんな中、コシアブラの栽培技術の確立を困難にしている要因の一つとして幼苗の生育の遅さが指摘されている (4)。

そこで、初期の生育を促進させる方法として、コシアブラと同じウコギ科であるヤマウコギ、タラノキを台木に用いた接ぎ木増殖を試みたのでその状況を報告する。

## II 材料および方法

接ぎ木増殖は、2008年、2009年に実施し、接ぎ木に用いた接ぎ穂は、群馬県みなかみ町内の個人宅庭木の個体から採取した (樹齢約18年、高さ5.3m、胸高直径9cm)。

1. 2008年接ぎ木増殖 2008年に行った接ぎ木に用いた台木は、2007年10月に林業試験場敷地の林内から掘り取り、林業試験場内苗畑に定植した。接ぎ穂は、2008年3月4日に前年伸長した枝から採取した。採取した枝は、湿らせた新聞紙に包んだ後、ポリ袋に入れ接ぎ木を行うまで冷蔵庫 (3℃) に保存した。接ぎ木は3月26日、4月7日に行った。3月26日には、ヤマウコギの台木1本、タラノキの台木5本、4月7日には、タラノキの台木3本に接ぎ木を実施した。接ぎ木は、接ぎ穂にあらかじめ芽を除いて接ぎ木テープで覆う方法 (1) で行った。接ぎ木後の遮光は行っていないが、4月7日実施箇所は隣接する林分の影響で半日陰になっている。調査は、接ぎ木後の活着状況を観察するとともに、接ぎ木直後及び2009年4月と10月に苗高の測定を行った。

2. 2009年接ぎ木増殖 2009年に行った接ぎ木に用いた台木は、2008年4月に林業試験場敷地内の林内から掘り取り、林業試験場内苗畑に定植した。接ぎ穂は、2009年

3月10日に前年伸長した枝を採取し、2008年接ぎ木増殖と同様の方法で保存した。接ぎ木は、3月24日、3月31日に行った。3月24日にはタラノキの台木9本に、3月31日にはタラノキの台木12本、ヤマウコギの台木9本に接ぎ木を実施した。接ぎ木の方法は、2008年接ぎ木増殖と同様である。接ぎ木後の遮光は行っていない。調査は、接ぎ木後の活着状況を観察するとともに、接ぎ木直後及び2009年10月に苗高の測定を行った。

## III 結果および考察

1. 活着状況 活着状況を表-1, 2に示す。2008年の接ぎ木増殖では、2008年5月時点でヤマウコギを台木に用いたもの (以下、ヤマウコギ台木という。) 1個体と、タラノキを台木に用いたもの (以下、タラノキ台木という。) 3個体に新芽の伸びがみられた。供試本数は少ないが、実施時期を変えたタラノキ台木では、4月7日に実施した方の成績がよい傾向であった。2009年10月時点でもこれらすべての個体は活着している。

2009年の接ぎ木増殖では、2009年5月時点でヤマウコギ台木は4個体、タラノキ台木は12個体に新芽の伸びがみられた。実施時期を変えたタラノキ台木では、3月31日に実施した方がよい成績であり、2008年接ぎ木増殖と同様、遅くに実施した方がよい傾向がみられた。その後、新芽の伸びがみられたタラノキ台木のうち、5月中旬に強風による接ぎ木部折損により4個体が枯損し、8月から9月にかけても4個体枯損した。8月から9月に発生した枯損の原因は、接ぎ穂と台木の不親和性によるものなのか、他の原因によるものなのか定かでない。そのため、2009年10月時点でヤマウコギ台木4個体、タラノキ台木4個体が活着している。

今回の接ぎ木増殖の結果、2カ年ともコシアブラの苗木を得ることができたが、得苗率としてはあまり高いとは考えられない。しかし、接ぎ木は、樹種によっては接ぎ手の技術によって活着率に差があるといわれている (7) ことや、接ぐ時期の適期や方法、適切な管理方法などを把握することで、得苗率を向上させる余地は十分にあると思われる。

2. 苗高測定結果 2009年10月時点で活着している個体の苗高測定の結果を図-1, 2に示す。

ヤマウコギ台木でみると、2008年増殖分は、接ぎ木当年に8cmの伸長が見られたが、2年目の伸長は殆ど見られなかった。2009年4月に伸長し始めた芽を誤って折ってしまったことが2年目の伸長を停滞させた要因ではないかと考えられる。2009年増殖分は、全ての個体に接ぎ木当年の伸長が殆ど見られなかった。2009年増殖に使った台木は、1年間苗畑で養生したにもかかわらず樹勢が弱く、太さも接ぎ穂とほぼ同じか細いものであった。このことが、伸長が滞った影響の一つと考えられる。

タラノキ台木でみると、2008年増殖分のうち、3月26日に接ぎ木をした個体は、接ぎ木当年、2年目ともに伸長が殆どみられなかったが、4月7日に接ぎ木をした個体は、2年目で苗高が1m程に達した。実生苗は発芽後、2年目で9~21cmくらいに成長するといわれている(6)。それに比べると2年で1m程に達した個体の初期成長が非常によいことがわかる。また、30cm程の山取り苗を同じ苗畑に植栽したが、1mの大きさになるまで最短で4年経過している(竹内未発表)。発芽が播種の翌年である特性(6)や、発芽後30cmまでの成長期間も考慮すると、実生苗に比べ栽培期間をかなり短縮できると考えられる。

2009年増殖分については、接ぎ木当年の伸びがすべて50cm以上であり、2008年増殖分よりも接ぎ木当年の成長がよかった。これは、台木の養生期間を1成長期分長くしたため樹勢がよく、それが接ぎ穂の成長につながったと推測される。

#### IV おわりに

台木にヤマウコギ、タラノキを用いたコシアブラの接ぎ木増殖が可能であることがわかった。このうち、タラノキを台木に用いた場合、接ぎ木当年から伸長がよいものが多く、初期成長を促す効果が見受けられた。しかし、今回の報告は接ぎ木後2成長期までの観察でしかなく、栽培技術として有効かどうかは、今後の生育状況を把握していく必要がある。また、活着後の原因不明の枯損の究明や、接ぎ木適期など栽培技術として確立するには課題は多いと感じる。しかし、今回の結果がコシアブラ栽培技術確立のための一助となればと期待する。

最後に、今回の試験にあたり、多大なる御協力を頂いた群馬県みなかみ町在住阿部博治氏に厚く感謝申し上げます。

#### 引用文献

- (1) 新井篤 (1990) コナラ、クヌギ採種園—優良個体の選抜と増殖—。林木の育種156:21~24.
- (2) 福田研介 (1999) コシアブラの取り木増殖。日林関東支論50:165~166.
- (3) 引田裕之 (2004) コシアブラの無性繁殖による育苗法

について。日林関東支論55:319~321.

- (4) 松本則行・児玉一廣 (2009) コシアブラ実生苗の成育と残存率。新潟県森研報50:55~57.
- (5) 日本徳用林産振興会企画委員会 (1991) 身近な森を生かす山菜・葉草栽培。157pp. 農村文化社、東京.
- (6) 坂口勝美ほか編 (1985) 有用広葉樹の知識。514pp. 林業科学技術振興所、東京.
- (7) 上田正文 (1996) ケヤキとトチノキの接ぎ木について。奈良県林試林業資料11:14~16.
- (8) 嬉野健次・市川寛子・金澤俊成 (2006) コシアブラ種子の胚発育に及ぼす湿潤低温処理時期と機関およびGA3処理時期の影響。園学研5:369~374.

表-1. 2008年接ぎ木増殖活着状況

使用台木	増殖年月日	実施本数 (本)	活着本数 (本)	
			2008年 5月時点	2009年 10月時点
ヤマウコギ	2008. 3. 26	1	1	1
タラノキ	2008. 3. 26	5	1	1
タラノキ	2008. 4. 7	3	2	2

表-2. 2009年接ぎ木増殖活着状況

使用台木	増殖年月日	実施本数 (本)	活着本数 (本)	
			2008年 5月時点	2009年 10月時点
ヤマウコギ	2009. 3. 31	9	4	4
タラノキ	2009. 3. 24	9	3	2
タラノキ	2009. 3. 31	12	9	2

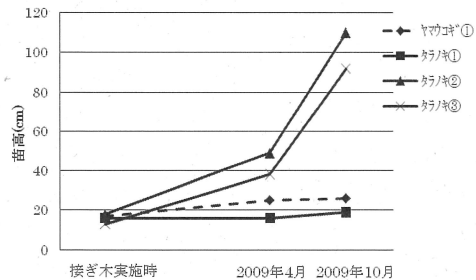


図-1. 2008年接ぎ木苗高測定結果

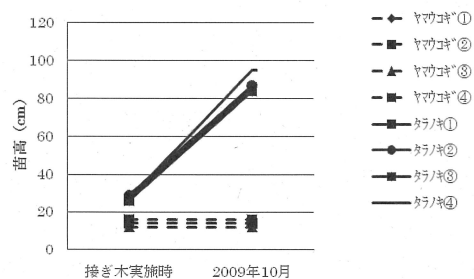


図-2. 2009年接ぎ木苗高測定結果